

絵画領域における現代学生への教育アプローチ

— 総合大学における造形美術教育指導の立場から —

藤崎 いづみ

キーワード：基礎課程、文様模写研究、オリジナリティ、制作と発表、創造力

1. 概要

本稿は筆者が2004年から桜美林大学に専任教員として着任し、指導してきた造形絵画教育の授業活動、及び授業以外の実践教育活動の報告である。

桜美林大学総合文化学群は2005年度に芸術教育の専門性を高めるため、それまでの文学部総合文化学科¹⁾(2000年度設立)から学群体制をとって独立し、演劇・音楽・造形デザインの3専修で構成し、2007年度新たに映画専修が設置され、現在4分野の専門教育のアートカレッジとして成立している。しかし、筆者が学んだ単科美術大学とは違い、総合大学での造形美術教育が特徴である。リベラルに様々な表現領域と共に歴史と理論を学び、実技と理論を融合させた教育を目標とする。

筆者の指導する造形デザイン専修学生は、時代的に必要とされているコンピュータグラフィックス、グラフィックデザイン他と並行し自身の中心的表現として絵画を専攻し、筆者担当の「デザイン演習A(ドローイング)」「美術演習B(日本画)」を履修学修し制作意欲を高め、ゼミ→卒業研究→学外発表会等の順で表現活動領域を広げていった。その表現技法は様々で授業で体得した画材を使い、或いは独自のアレンジによる技法を駆使し、「好きな描きたいものを描く」という基本姿勢である。本稿では個々の学生の作品を紹介し、その成長・発展を追いつつ、総合大学での教育課程のプロセスの中で育成されるクリエイティビティについて明らかにする。以上のような実践を考察し、今後の課題につなげていくこととする。

2. はじめに

最初に、総合大学での造形美術教育の指導者として、絵画領域における現代学生への教育の具体的実践例を次の項目から報告する。学生は現代の情報化革命によりコンピュータ系科目を学びながら、自分の追求したい絵画系科目の修学から表現者としてのバランス感覚を養成し、その成長過程でたくましく物を創る力を身につけていく。これを明確化する。

3. 授業実践

絵画科目区分の中で、筆者が担当する2科目について紹介する。

3-1 科目名「デザイン演習 A (ドローイング)」

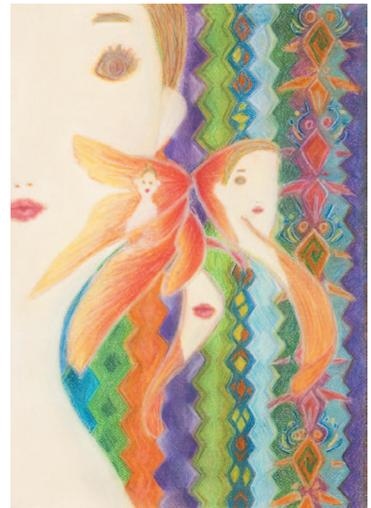
- 時限数 週2時限
- 履修者 毎年20名前後
- 授業概要

「手に筆を持って仕事をする」という行為について、水彩・アクリル・パステル・水墨画などの技法を入口として、タブロー絵画の実技制作を目標とする。ドローイングの技術とアーティスト性の養成。独自の絵画表現と遊び感覚を発見。²⁾

- 授業計画 (シラバス)
 - ① ガイダンス・授業内容説明
 - ② 画材説明・実習「水彩技法遊び」
 - ↓
 - ④ 選択課題・技法選択・テーマ選択
 - ↓
 - ⑨ 講評
 - ⑩ 自作テーマ選択・タブロー絵画制作
 - ↓
 - ⑮ 講評・提出

この科目は、絵画制作の基礎講座で自らのテーマを見つけ作品化する。水彩技法から入り実践的な演習のトレーニングを行い、ここで自分の描きたいものを定め位置づけるため、上記の内容で進めていく。

最初のプログラム実習「水彩技法遊び」は、筆者が兼任授業担当の健康福祉学群³⁾ 保育専修（保育士養成課程）の造形授業「基礎技能」においてワークショップ形式で実施。作



きんぎょ (36.4cm×51.5cm)
パステル画 青木優衣

品傾向は保育専修学生は人間的で暖かみがあり、造形デザイン専修学生は完成された規律とオリジナルな仕上がりであり、その傾向の違いは面白い。

3-2 科目名「美術演習 B (日本画)」

- 時限数 週 2 時限
- 履修者 毎年 20 名前後
- 授業概要

この授業では日本画材（岩絵の具）の色のこだわりと装飾様式美について修得する。彩色図案模写を学習し、どの様にすれば美しい平面作品が描けるか、デザイン（意匠）絵画的な視点からイキな日本画作品を成立させることが目標である。⁴⁾

• 授業計画（シラバス）

- ① ガイダンス・授業内容説明
- ② 日本画材、宝相華文様・縹綯彩色資料説明
- ③ 構成、色彩計画、小下図制作
- ↓
- ⑤ 雲肌麻紙、新鳥の子紙の張り方について
- ⑥ 岩絵の具の溶き方の手ほどき(膠⁵⁾ 胡粉⁶⁾ 他基本画材)
- ⑦ 図案下描き
- ⑧ 骨描き⁷⁾ (和紙に転写した宝相華文様を墨入れする)
- ⑨ 彩色
- ↓
- ⑮ 提出・講評

最初のプログラムのテーマである宝相華文様は忍冬文様⁸⁾と並び世界 2 大文様であり、その彩色を縹綯彩色という。宝相華はぶどう・ざくろ・牡丹の花の理想的形態を仏様のために様式化し、浄土教の

流行によってその形態が変化し、平安時代後期宇治の平等院鳳凰堂に描かれた頃、最も理想的な美しさを形成し造形的に絶頂期を迎える。この様に、自然物は様式化され美の歴史や世界を彩ってきた。装飾様式文様は重要なデザインの範疇であり、日本の美術の歴史は、生活を彩る装飾意匠美の歴史である。宝相華文様・縹綯彩色模写課題⁹⁾は古典芸術の自然物をモチーフにした造形色彩美を習得でき、同時に岩絵の具の技法の手ほどきの「和紙に岩がのせられる」技術を効果的に学ぶことが可能である。



宝相華文様・縹綯彩色模写研究
(15.8cm×22.7cm) 日本画 近内重美

4. 発表活動

前述までの授業プログラムを経て、自由に意欲的にタブロー絵画としての作品制作姿勢を確立し、作品を完成した学生は、次に発表活動を行う。この章では筆者が企画したゼミ学生の学内ギャラリーでの作品展の実践例を紹介する。4-1 選抜展での教育アプローチ事例 (1) から事例 (6)、4-2 卒業研究作品抜粋事例 (1) から事例 (5) は次に記載する。

4-1 選抜展での教育アプローチ

事例 (1) 2006 年度 11 月

文学部総合文化学科 4 年生鈴木恵子初個展「その目が映すもの」

桜美林短期大学部英文科からの編入生で、当時文学部総合文化学科造形デザインコース 4 年生の例を紹介する。

鈴木さんは、旧総合文化学科造形デザインコースの全ての演習科目を履修し、安定した造形力を獲得した。この個展は鈴木さんの編入後約 2 年間の制作活動の集大成である。鈴木さんがこだわっている「その目が映すもの」という主題での発表を実現した。各々の作品の中の女性像は瞳に力があり、確かに何かを見据えているようである。作品会場は 12m×20m のギャラリーで、会場を全て作品で埋め尽くした。代表作品は 5m×3m のアクリル画 3 点と、水墨画、陶芸、CG イラストレーション、計 280 点を展示。大学広報誌 OBIRINER に 4 ページの取材記事が掲載された。以下、写真は会場風景と作品紹介。



夢と夢の狭間を彷徨う狩人たち (300cm×500cm) アクリル画 鈴木恵子

事例 (2) 2008 年度 12 月

総合文化学群造形デザイン専修 4 年生寺田美奈子初個展「Bell」



総合文化学群 1 期生の寺田さんは、卒業後はアニメーション制作会社を経て、現在はアパレル会社デザイナーとして活躍している。

デカダンスで繊細な絵画世界をクリエイトし自身の作品サイトを運営し、そこから受注されたイラストの仕事もこなす。桜美林大学はキリスト教主義の大学でクリスマス行事が盛大であり、その時期にあわせた開催で作品展テーマを「Bell」とした。タブロー線描絵画、CG イラストレーション合計 50 点を出品。

Bell (DM 掲載作品)

ペン・CG 画 寺田美奈子

事例 (3) 2009 年度 12 月

総合文化学群造形デザイン専修 4 年生

山根奈緒美・山森冬美初作品展「ひゃくてんてん」

この年度は二人展を実施した。前述の事例 (1) と (2) のゼミの先輩の作品展に刺激された後輩ゼミ学生の二人展を企画した。山根さん、山森さんは個々がファンタジックな世界を展開した。アクリル画、日本画、油絵、版画、CG イラストレーションなど表現は多岐にわたり、3 年次の筆者担当のゼミから 4 年次までに制作した二人で百点の作品展示で、「ひゃくてんてん」というサブタイトルをつけた。このネーミングはあくまで筆者の思いつきである。なんとなく、小柄でコミカルな二人の印象から、「あの二人が百点の作品を描いた」という感は面白いと思いついたのである。



パワー受信 (51.5cm×72.8cm)
アクリル画 山根奈緒美



いろべよう (112.1cm×162.1cm)
アクリル画 山森冬美

事例 (4) 2009 年度 12 月

総合文化学群造形デザイン専修 3 年生ゼミ作品展

2009 年度は前述の事例(3)の二人展と同時開催のゼミ作品展を実施した。総合文化学群造形デザイン専修 3 年生 7 名による合同作品展で、ゼミ概要を含め詳細は以下の通りである。

この授業では、筆者の授業の履修体験から、「絵画領域」の自立した制作姿勢を確保し、独自のテーマと表現方法（日本画・アクリル・ミクストメディア・他）でのタブロー絵画作品のまとめ方、見せ方、発表形式を学習し、作品完成度を高めることを目標とし学内作品展を行う。（授業回数全 30 回＋作品展一週間）

授業の方法は次の通りである。

- ① 第一回ゼミで各自の作品の制作テーマと方向性を発表。「私はこれが描きたい」という発言。
- ② 5 月に見学会を実施。「藤崎いづみ作品展」桜美林大学アカデミー（新宿キャンパスで筆者担当の日本画教室開講に際して個展開催）にてゼミ学生、選抜展学生、卒業研究学生に日本画の技法、表現のレクチャーを行う。額装から絵をはずし、直に手で岩絵の具のザラツとした質感に触れさせ説明する。作品群の中の学生の感覚に近いミクストメディア技法、吹き付け技法、金泥銀泥以外の画材で金銀を感じさせる技法を説明する。このレクチャーの目標は、若い人なりの現代アートの感性で、色と材質が美しい岩絵の具や、ミクストメディアの面白さを自由に柔軟に取り入れ作品化してほしいと推奨することである。そこからメディア・アートとの融合も可能であると期待する。
- ③ 夏休みは自主制作。以下、作品展までの具体的スケジュール（秋から 12 月にかけて）
- ④ 12 月中旬の作品展に向けて DM 制作、ポスター制作、会場構成、受付シフト、広報活動を指導する。作品展とは作品制作だけでなく、その他様々な事もこなさなければならない。
- ⑤ 額装計画と額縁購入、額縁制作。12 月前半は作品の仕上げに集中する。
- ⑥ 作品展直前の土日は搬入と会場準備で、次期ゼミ学生、1 年生の協力で会場設営を行う。
- ⑦ 12 月中旬～後半は作品展会期と搬出。会期中の土日は学生のご家族に御来場頂き懇親会のようなであった。同時期に音楽専修のピアノゼミコンサート会場に、作品展の代表作品を入口看板デコレーションとし、作品展 DM をコンサートパンフレットと一緒に配布して頂くという広報活動を行う。

結論として、次のことがいえるであろう。作品制作は個人の責任でテーマ・画材を選択し、表現方法を訓練、ひとりで完成をめざす孤独な仕事だが、発表・展覧会は決して一人の力では実現できない。周囲の多くの協力があって初めて良い作品展が開催できる。学生作品展後、学生は実感しているようである。

事例 (5) 2010 年度 12 月

総合文化学群造形デザイン専修 4 年生「宮川友子・八木美樹初作品展」

昨年度に準じて二人展を実施した。この企画では宮川さん、八木さんの二人の画材探求における制作意識に着目し、「アクリル画の宮川さん、日本画の八木さん。画材へのこだわりの作品展です」と、筆者がテーマを掲げた作品展を企画した。

宮川さんは 4 年間こだわり続けたアクリル技法を柔軟に展開し、日本画材他の混合技法で独特の現代的感覚の若者肖像画を描く。それは、全ての造形演習科目で履修体得した画材技法を自分流に発展した絵画である。さらに写真・陶芸もこなす。以下、作品紹介。



アキちゃん (27.3cm×40.9cm)
アクリル画 宮川友子



きゃん (65.2cm×80.3cm)
日本画 宮川友子

八木さんは日本画材（岩絵の具）を自由に操り、知覚現象としての「夢」をテーマに、「動物」と「花」をモチーフに作品展開する。カラフルで繊細で強い絵画感性を持ち合わせる学生である。本人コメント「岩絵の具特有の鮮やかな色や、膠を煮込み絵の具を調合する料理のレシピのような技法、なかなか乾かず和紙にのせると優しく滲んでいくその様子など、すべてが魅力的で自分の腕に馴染んだ。」¹⁰⁾「夢で見るそれらは私の脳内の創造にしか過ぎないが、私にとっては大きな影響を与えるものの一つである。」¹¹⁾「優しさを、私は動物の目元で表現するようにしている。なぜなら人間然り、どんな動物でも優しさは目元に出やすいからである。たとえどんなに獰猛な猛獣でも優しい瞬間は必ずある。その瞬間を描くことが私のこだわりであった。そんな私のこだわりはもう一つある。それはどんな動物を描いても、必ず隣に植物を描くことだ。」¹²⁾ 以下、作品紹介。

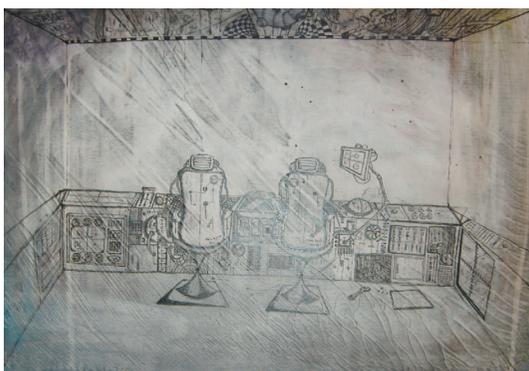


夢カエル (24.3cm×66.8cm) 日本画 八木美樹

事例 (6) 2010 年度 12 月

総合文化学群造形デザイン専修 3 年生ゼミ作品展

2010 年度は、前述の事例 (5) の二人展と同時開催のゼミ作品展を実施した。12 名の学生の作品の種類は豊富で、日本画、アクリル画、ペン画、水墨画の世界を描き発表。授業運営は事例 (4) に準じている。ゼミコラボレーションとして、映画専修の山本文勝先生ゼミグループ制作短編映画「ゲートを越えろ」(脚本は映画専修全学年からオーディションして決定した) にゼミ学生の今井龍太郎ボールペン画が CG 化¹³⁾ されて、学内映写室で上映され、メディア・アートとの融合が可能となった。以下、作品紹介。



ゲートを越えろ(36.4cm×51.5cm)ペン画 今井龍太郎

下記作品は、大学生活最後の就職活動を風刺画としている。本人コメント「いやな時代に生まれたね。なんて、飽きるほど聞きました。正直いやになるくらい。でも、私たちにだって諦めたくない夢があります。信じていたい自分の可能性があります。傷だらけの彼らの姿と物騒な武器にそんな思いを力強く添えてみました。」¹⁴⁾



就活戦争・重圧(36.4cm×51.5cm)
アクリル画 阿部文香



就活戦争・推進力(36.4cm×51.5cm)
アクリル画 阿部文香

4-2 卒業研究作品抜粋

これまでの制作の取り組みから、さらに表現を明確化し整理し、集大成として制作された、前項でとり上げた学生達の卒業研究発表作品を紹介する。

事例 (1) 2009 年度卒業研究作品 山森冬美

「浮遊」 183cm×276cm 木製パネル・アクリルガッシュ・ジェッソ・石膏

4-1 選抜展での教育アプローチ事例 (3) 出展の学生。本人の放つオーラをテーマとした作品。イメージを「不思議・リズム感・明るい・優しい・少しの毒・守護霊・目に見えないもの・空気」¹⁵⁾ という単語に置き換え、そこから色彩や形態を発想した抽象芸術・現代アート作品であり、多感な年齢のセルフポートレートといえよう。



事例 (2) 2010 年度卒業研究作品 宮川友子

「わたし」 直径 150cm の正円 キャンバス・アクリルガッシュ・ジェッソ

「ひょうがきのたたかいかた」 147.5cm×120.2cm

キャンバス・アクリルガッシュ・ジェルメディウム・グロスメディウム・石膏・コラージュ

4-1 選抜展での教育アプローチ事例 (4) (5) 出展の学生。宮川さんは、本学群 AO 入試選抜で入試テーマ課題の二点のセルフポートレートを持参し合格した。そして、4年後の卒業研究作品はさらなる成長したセルフポートレートをテーマに選んだ。作品「ひょうがきのたたかいかた」は、現代の大学4年生の象徴的な時間である就職活動をテーマとし、リクルートスーツで立ちポーズの自画像（セルフポートレート）と背景にエントリーシートや選考通知などのコラージュで画面構成した。一方の「わたし」は、日常の本人の素直で自由なキャラクターで楽しく生きている様子を表現した。



わたし



ひょうがきのたたかいかた

事例 (3) 2010 年度卒業研究作品 八木美樹

「THE FORBIDDEN FLOWERS」 65.2cm×90.9cm を 4 点 白麻紙・岩絵具・色鉛筆

4-1 選抜展での教育アプローチ事例 (4) (5) 出展の学生。ここでは、西洋に伝わる「神話上の動物」グリフォン・ペガサス・ドラゴン・フェニックス、4 匹の霊獣をテーマとし、各々の伝承のエピソードからイメージした色と形態で画面構成を試みている。「グリフォンは知性、ペガサスは光、ドラゴンは慈愛、フェニックスは勇気。4 匹はそれぞれ信念を持った上で戦い、同じ一つの花の星を守っているのである。これら 4 匹の神話上の動物を、花のボールを挟んで対座させることでこの作品は完成である。」¹⁶⁾ 個々が独立した作品と捉える。八木さんは当初、東洋の四神、青龍・白虎・朱雀・玄武をテーマと発想したが、西洋のモチーフを日本の伝統的な岩絵の具で描きたいと思いつき、その mismatch な面白さに着地した。



左上グリフォン 右上フェニックス 左下ペガサス 右下ドラゴン

事例 (4) 2010 年度卒業研究作品 五十嵐ちひろ

「Il mio bello mondo- 美しきわたしの世界」 90.9cm×116.7cm 水彩紙・水彩絵具

4-1 選抜展での教育アプローチ事例 (4) 出展の学生。五十嵐さんは、前述の授業実践例 3-1 科目名「デザイン演習 A (ドローイング)」で追求した水彩技法を発展させ、繊細で根気よくオリジナル技術をつかみ描きつづけた。

Il mio bello mondo とは、イタリア語で美しき私の世界というテーマで、五十嵐さんが子供の頃に空想した世界観を守り続けオーストリアの Hochosterwitz 城や、北海道の雲、イタリアの風景を参考に、幻想心象風景絵画にアレンジした。



部分図

事例 (5) 2010 年度卒業研究作品 城間真麻

「百鬼夜行」147cm×364cm 白麻紙・墨

4-1 選抜展での教育アプローチ事例 (4) 出展の学生。前述の授業実践例 3-1 科目名「デザイン演習 A (ドローイング)」で取り組んだ課題モチーフ「空也上人像」「阿修羅像」のペン画作品から転じてペンから墨へ移行し制作。さらに授業実践例 3-2 科目名「美術演習 B (日本画)」でモノクロの深さを表現する墨に着目し水墨画に至る。百鬼夜行 (さまざまな妖怪が列をなして夜行する事。¹⁷⁾) について、文献から各々の妖怪を丁寧に調査し、「鳴釜」「おとろし」「朧車」「牛鬼」「雲外鏡」などを描いた。オリジナリティとの融合に苦勞しながら墨の滲みなどの練習を繰り返し完成した。



部分図

ここまで学生達は絵画制作と発表活動において、基礎課程から積み上げオリジナリティを確立した。

5. 卒業後の制作発表活動の社会的役割

学内での実習と作品発表会を経験した学生は、卒業後社会に出て表現活動を行う。

事例 (1) 2010 年度 5 月

第 18 回伊豆高原アートフェスティバルの参加出展

伊豆高原アートフェスティバルは、1993 年から毎年 5 月に開催され、伊豆高原に広がる公共施設にアート作品を一ヶ月展示し販売も行う企画で、桜美林学園伊豆高原クラブ¹⁸⁾が支援し展示している。出展した卒業生山森冬美さんは作品が購入され、一企業からパッケージのイラストレーションの仕事も依頼された。4-1 選抜展での教育アプローチ事例 (3)、4-2 卒業研究作品抜粋事例 (1) 出展の学生。そして 2011 年 5 月開催の第 19 回伊豆高原アートフェスティバルは、4-2 卒業研究作品抜粋事例 (2) から (5) の卒業研究作品を出展。このように学生が自主的に感性を高め、制作意識を向上させていくために、はじめの一歩から自身の表現が社会参加や仕事として成立するまでを支援することが教員の役割である。

事例（2） 卒業後の制作・出展—未来へ向かって、鈴木恵子

筆者が最初に学内選抜作品展を企画した4-1 選抜展での教育アプローチ事例（1）の文学部総合文化学科卒業生の鈴木恵子さんは、アーティストとしての成長が伺える。2010年からニューヨークに留学した。グローバルな活動として東京—ニューヨークの巡回展出展。又、出身地千葉県長生郡長柄町役場庁舎ホールに作品「明日への願い」130.3cm×162.1cm アクリル画が収蔵された。本人コメント「長柄町が未来に希望を持って進んでもらいたいと思い描きました。」¹⁹⁾ 又、同町の公民館前道路に1m×8mの鈴木さんデザインの横断幕が掲げられた様である。以下紹介の米国シカゴのカフェ「Cafe Materria」にてポスター展「Cafe de Graphix2」出展。国際的活動、地元の地域交流に貢献出来、成長したことが何より嬉しく思う。



ポスター作品は原画の日本画作品 立春(130.3cm×162.1cm)と写真構成したメディア・アートとの融合作品

6. 時代ごとの制作テーマの変化について

以下は学生の絵画領域（ゼミ / 選抜展 / 他）におけるテーマ（代表的なもの）の、時代的な流れである。時代ごとの学生の感受性は制作テーマに大きく反映するのである。

- 2004年～2005年：明解・大胆・未来への期待・挑戦
- 2006年：未来、現在、過去・天使・LOVE・Sweet・enjoy
- 2007年：ストリート感・ポップカルチャー・ブラックユーモア
- 2008年：ロストコミュニケーション・白日夢・はかなさ
- 2009年：無表情・アンバランス・ファンタジー・不思議
- 2010年：反骨精神・突破力・旅立つ・強くたくましく・沈黙
- 2011年：緻密と繊細・うつろう・星屑・泡・うつりかわり

7. 終わりに

思えば、はじめは鉛筆の削り方さえ、ままたらなかつた学生達であった。が、これまで紹介してきたように、彼らはそのクリエイティビティを発展させていった。本稿のような造形絵画教育の場においては、基礎を外さず展開していく長い四年間のプログラムの道のりで、若者の現代的な創造性と自由度を担保していくことが大切である。

2009年秋、筆者の母校である武蔵野美術大学80周年記念フォーラム「世界美術大学学長サミット」に出席した。これは国内外の美術大学の学長、学部長によるシンポジウムで美術大学の時代的使命と美術教育の意義を検証する大会であった。

基調講演のシカゴ美術館附属美術大学総長トニー・ジョーンズ先生の講話に大変深い感銘を得た。以下の様に述べられた。(朝日新聞,2009)

今、美術大学は旧世代にとっては異星人のような、デジタル時代と情報革命の落とし子を学生として迎えています。彼らは膨大なイメージのコレクションにより、スタイリッシュでセンスの良いものをつくりあげる能力にたけています。しかし、そこに社会との関係性や意味はなく、「しょせん物まねにすぎない」との意見もあります。現在の若者の多くは、アートとデザインの歴史的な継続性と、社会における意義について理解が乏しいとの指摘もあります。

筆者は自らの修学と教育経験から、基礎課程に効果的にアプローチすること、歴史・古典を学ぶこと、ここからの自由とオリジナリティの提案にこだわった。

2012年度から使用の中学校美術教科書として申請合格した3社の教科書には、日本美術の内容が増加され、日本の伝統色一覧が掲載され、風神雷神図など日本画という自国の

文化を重視する傾向が見られる。時代的には日本画は基礎教養課程の中に位置づけられつつある。

これまで見てきたように筆者の指導により、新時代の学生達は自国の文化の日本画材の技法を身につけ、さらにアクリルやCGなど様々な現代の画材を駆使し、彼らのイメージを造り上げる力が養成され、そのクリエイティビティに付加価値が与えられた。造形絵画作品制作とは物事を実現できる力を身につけることである。常に未来に向かって地道でエネルギーに制作し、誠実に発表する志は、彼らが生きていくために必要なことであると提言する。そして、今後の課題として、学生達が発表し続けていくための授業の取り組みを、時代と共に変化していく学生の資質にあわせていくことが大切であるとする。

教育者の立場から、造形デザイン専修の学生の表現者としての社会参加を願い、大学で美術という学問に出会い²⁰⁾、造形と向き合う真摯な志を忘れずにいてほしいと願う。そして、様々な事象に作品でも人でも愛情をもって向きあえることが大切であると伝え、今後も指導を心がけたい。

本稿の作成において、ご協力頂いた学生、卒業生に心から感謝申し上げます。

注

- 1) 桜美林大学文学部総合文化学科は演劇・音楽・造形デザイン・哲学思想の四分野を総合的に学ぶ新設学科として立ち上げられた。
- 2) 筆者執筆 2010 年度桜美林大学シラバスより引用。
- 3) 桜美林大学健康福祉学群では、乳幼児から高齢者、障害者まで全ての人を対象とした、「健康」と「福祉」をテーマに総合的に学習していく。2011 年度入学者用履修ガイドより引用。
- 4) 筆者執筆 2010 年度桜美林大学シラバスより引用。
- 5) 日本画材（岩絵の具）は粒子で、接着剤として動物の骨などのゼラチン質で固めた膠を湯煎で溶かして使用する。
- 6) 日本画材の基本色となる白は牡蠣殻を精製して作られた胡粉を乳鉢で砕き、膠とよく混ぜ、練って白絵の具を作り使用する。
- 7) 下描きしたモチーフの輪郭線を墨などで線描すること。
- 8) 古代オリエントで発生し中国から日本に伝わった「すいかずら」のようなつる草の文様。
- 9) 筆者が東京芸術大学大学院で指導されたカリキュラムである。
- 10) 11) 12) 2010 年度卒業生八木美樹卒業研究レポート「表現のテーマ」より引用。
- 13) この企画は 2009 年度総合文化学群 FD（教員研修会）でゼミ年間報告の発表を筆者が行い、質疑応答で映画専修山本文勝先生からリクエストを頂き実現した。
- 14) 2010 年度ゼミ学生阿部文香ゼミ企画書「就活戦争」より引用。
- 15) 2009 年度卒業生山森冬美卒業研究レポートより引用。
- 16) 2010 年度卒業生八木美樹卒業研究レポート「表現のテーマ」より引用。
- 17) 『広辞苑』（第六版）より。
- 18) 伊豆高原にある桜美林学園が保有する宿泊施設。
- 19) 千葉県長生郡長柄町広報紙「ながら」NO.333 より引用。
- 20) 筆者執筆桜美林大学教職課程美術教員養成理念より引用。

参考文献

- 桜美林大学講義案内 2010
- 東京芸術大学大学院デザイン専攻講義 担当おおばつねきち「日本文様史」資料 1987
- 建築情報.net http://www.kentikulink.net/architectjiten/ag15/ag15_1611.html
- 中高生のための「岡山の日本画—江戸時代から現代まで—」岡山県立美術館 2009
- 図解日本画用語辞典 東京藝術大学大学院文化財保存学日本画研究室〔編〕2007
- 「ART WORKS Blog」桜美林大学総合文化学群造形デザインコース学生作品ブログ
<http://zokei.obirin.ac.jp/>
- 藤崎いづみ (2009) 「専攻演習指導報告」『総合文化学群・FD (教員研修会) 次第』
- 2009年12月12日付 朝日新聞朝刊 全面広告 武蔵野美術大学80周年記念フォーラム世界美術大学学長サミット シカゴ美術館附属美術大学総長トニー・ジョーンズ先生基調講演「美術・デザイン教育における課題と挑戦」
- 2011年3月31日付 朝日新聞朝刊 教育面